

ワーズワスの『場所の名付けについての詩』

佐々木幸子

〈目次〉 序

I 『場所の名付けについての詩』と「名付け」

II 『場所の名付けについての詩』の構成

結び

序

ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) の詩の中に、『場所の名付けについての詩』 (“Poems on the Naming of Places”) と題された 7 篇の詩群がある。そのうちの 6 篇は、ワーズワスの詩的創造力の最盛期であるいわゆる「偉大な 10 年」(the great decade)⁽¹⁾ 中の 1800 年前後に書かれたものであるが、それにもかかわらず、ワーズワスの代表作として詩集に取り上げられたり、評論家によって論じられることはまれな作品群である。しかしながら、強烈な印象を与えることはなくとも、読む者が思わず心惹かれるような密やかな魅力をたたえた詩篇であるように思われる。そこで、これらの詩篇に筆者なりのアプローチを試みたいと思う。

I 『場所の名付けについての詩』と「名付け」

「名付け」という行為についてまず我々の頭に浮かぶのは、『旧約聖書』(*The Old Testament*) 中のアダム (Adam) の名付けであろう。まだ樂園を追われる前の無垢のままのアダムが行った聖なる行為である。しかし、「名付け」は『聖書』以外にも数多く見出され、文化人類学的にも神話の起源として注目されている行為である。それは、さまざまな民族、部族の間で行われていたものであり、ワーズワス自身も、この詩群の一つ “To Joanna” の中でその最も素朴なものの一つに触れている。おそらくそれは、こうした名付けについての典型的な例ではないかと思われるのであるが、湖水地方 (the Lake District) にある小さな川であるローサ川 (the Rotha) の川岸に、古代北欧のルーン人が彫ったもの (Runic) とみなされている名付けの文字が残されているというのである (1.28)。ワーズワスは、この詩に付した脚注の中で、湖水地方にはこうした天然石の上の彫りもの (Inscriptions) がいくつか見出されること、そして、時を経ているため、ルーン人のものとみなされているが、実際はかつてローマ人がイングランドを支配していた当時、刻みつけたもの (Roman) であることを明かしている。

In Cumberland and Westmoreland are several Inscriptions upon the native rock, which, from the wasting of time, and the rudeness of the workmanship, have been mistaken for Runic. They are without doubt Roman.

この例からも、「名付け」は古代からさまざまな民族が、非常に素朴な形で行ってきたものであることが推測されよう。『場所の名付けについての詩』は、遠い昔から人々が行ってきたそうした名付けを、ワーズワスが自ら行ったことについての詩なのである。

ワーズワスは、これらの詩の冒頭の「趣意書き」(Advertisement)の中で、次のように語っている。

By persons resident in the country and attached to rural objects, many places will be found unnamed or of unknown names, where little Incidents must have occurred, or feelings been experienced, which will have given to such places a private and peculiar interest. From a wish to give some sort of record to such Incidents, and renew the gratification of such feelings, Names have been given to Places by the Author and some of his Friends, and the following Poems written in consequence.

田園地方に住み、田園地方を愛する人々がしばしば見出す名前がなかったり、名前がはっきりしない場所、そのような場所でちょっとした事件が起きて特別な感情をいだくようになった時、その感動を記憶に残すために名付けを行ったというのである。

そこでまず、それぞれの「名付け」に注目しながら、これらの詩の内容を考察してみたいと思う。

- (1) ① “It was an April morning: fresh and clear” (1800)

最初に登場するのは春の詩である。

素晴らしい4月のある朝、森も野原も小川も一切のものが生の息吹きにあふれ、喜びと希望に満ちあふれているようであった。

The spirit of enjoyment and desire,
 And hopes and wishes, from all living things
 Went circling like a multitude of sounds.

(ll.6-8)

詩人は森や大気の中に漂う生の息吹きを感じながら、小川のほとりをさまよっている。そして、小川が「突然の曲がり角」に達し、川の水音が急に「嬉しげな音をほとばしらせる」のを耳にするのである。そんな時、ワーズワスには、それまで森の生き物たちが奏でていた嬉しげな生命の音は、一つの「声」をもったもののように感じられ、その歌声は、「決してなくなることはない自然の生長力」、あるいは何か「大気が自然に生み出しているもの」のように思われてくる。

... that all

Which I till then had heard, appeared the voice
 Of common pleasure: beast and bird, the lamb,
 The shepherd's dog, the linnet and the thrush
 Vied with this waterfall, and made *a song*
 Which, while I listened, seemed like the wild growth
 Or like some natural produce of the air,
 That could not cease to be.

(イタリックは筆者。ll.23-30)

ここで、ワーズワス是一種のヴィジョン(vision)体験をしているとっていいだろう。というのも、周囲のものが一つの声をもっているように聞こえてくるというのは、ワーズワスのヴィジョン体験の強烈なものにしばしば登場するものである。そして、そんな時目に映った光景はいつまでもワーズワスの心に刻まれ、「時点」(spots of time)とよばれるあの永遠の瞬間の一つとなるのである。⁽²⁾

こうして太古から絶えることのない自然の生命力の奏でる歌を聞きながら、ワーズワスが目にした光景、それは小川と一面緑におおわれた谷、そして対岸の頂には一軒のコテージがある——そんな秘境であった。そこにワーズワスは、最愛の妹ドロシイ(Dorothy)の別名であるエマ(Emma)の名をつける。

And, on a summit, distant a short space,
 By any who should look beyond the dell,
 A single mountain-cottage might be seen.
 I gazed and gazed, and to myself I said,
 “Our thoughts at least are ours; and this wild nook,
 My E_{MM}A, I will dedicate to thee.”

(ll.34-39)

こうして「エマの谷」はワーズワスの第二の我が家となり、詩人の亡き後も事情を聞き知った羊飼いがこの名を語り継ぐことになるだろうと、ワーズワスはうたう。

名付けによって、この秘境自体がエマそのものとなったと言えるかもしれない。

(2) ②“To Joanna”

(1800)

次に登場するのは、ワーズワス夫人の妹ジョアナ(Joanna)である。

ワーズワスは、ある夏の日の明け方に、ジョアナとローサ川の岸辺を散歩する。「東を向いた背の高い大岩」の前まで来て、それを見上げた時、その岩の上に生えている灌木や並木、花などが、朝日を浴びて見事な色調で混じり合い、詩人を魅了する。思わずワーズワスは恍惚となってしまうのだが、それを見たジョアナは大声で笑うのであった。すると驚いたことに、その大岩も周囲の断崖や岩々も、その声を反響して次々と笑い返し、なかなか鳴り止まない。詩人は「確かに山々は大声で叫んだのだ」と感じる。

... sure I am

That there was a loud uproar in the hills.

(ll.72-73)

この時、共にいたジョアナも「何か怖いものから身を守るように」思わずワーズワスに寄り添ったという。

And, while we both were listening, to my side
 The fair Joanna drew, as if she wished

To shelter from some object of her fear.

(ll. 74-76)

「意外さ」と「恐怖」の感情が、二人に「生きた自然」をつぶさに実感させたと言えるだろう。その後、少し時を経てからこの場所を訪れたワーズワスは、同じ体験を共に分かちあい、そのきっかけを作ってくれたジョアナにこの場所を捧げ、かつて古代ローマ人が行ったように、ローサ川の岩に彼女の名を刻んだのである。

—And hence, long afterwards, when eighteen moons

Were wasted, as chanced to walk alone

Beneath this rock, at sunrise, on a calm

And silent morning, I sat down, and there,

In memory of affections old and true,

I chiselled out in those rude characters

Joanna's name deep in the living stone: —

(ll. 77-83)

(3) ③“There is an Eminence”

(1800)

ワーズワスと妹ドロシイの住む湖水地方のグラスミア(Grasmere)には、小高い丘がいくつもある。その中でも、「最後に落日と語り合う」峰に彼らは心惹かれる。というのも、この頂は兄妹が夕暮れ時に公道を歩いていると、頭上遙か高く聳えているのが見うけられ、「しばしば深い静寂を送って」彼らの「心を蘇生させてくれるかのよう」だったのである。

And, when at evening we pursue our walk

Along the public way, this Peak, so high

Above us, and so distant in its height,

Is visible; and often seems to send

Its own deep quiet to restore our hearts.

(ll. 4-8)

しかし、この峰は人の心を蘇らせてくれるだけではない。「流星」が好んで訪れる場所でもあり、夜空に大きく輝いて美しいあの「木星」も、この峰の上にかかる時ほど美しく輝くことはないという。そんな静寂の美をもつ孤独

な場所でもあった。

The meteors make of it a favourite haunt :
The star of Jove, so beautiful and large
In the mid heavens, is never half so fair
As when he shines above it. 'Tis in truth
The loneliest place we have among the clouds. (ll. 9-13)

この「雲の間でも最も寂しい場所」と思われる峰に、詩人と深い心の交わり(communion)で結ばれている妹ドロシイは、兄の名をつける。

And She who dwells with me, whom I have loved
With such communion, that no place on earth
Can ever be a solitude to me,
Hath to this lonely Summit given my Name. (ll. 14-17)

人の心を蘇生させ——いわゆるワーズワス詩の“healing power”（癒す力）である——⁽³⁾しかも、夜空の星をさらに美しく輝かせる孤高の峰、それこそドロシイの心の中の兄ウィリアム・ワーズワスの姿だったのである。

ここには、ワーズワス自身の思いは述べられていない。

この詩に流れている意識はどこまでも忠実な叙景詩人としてのそしてドロシイのやさしい兄としての自覚でしかない。彼はただ現実の山々の姿をあるがままに描き、最愛の妹の命名をあるがままに受け入れただけなのである。⁽⁴⁾

しかしながら、ここに描かれているワーズワスの姿は、詩人としてのワーズワスをこれ以上の確に表わすことができないと思われるほどの得た表現だと、筆者には思われてならない。おそらく、自然との交わりを兄と共にしてきたかけがえのない存在であるドロシイにしかできなかった命名であろう。そして、ワーズワス自身そうありたいと願った自画像でもあったことだろう。しかし、そういったもろもろの思いは詩中には表現されていない。起こったことを

あるがままに飾り気のない言葉で表現しているだけなのである。言ってみれば、この詩自体がその表現を通して、孤高の詩人ワーズワスの姿を提示してくれているのである。

(4) ④“A narrow girdle of rough stones and crags” (1800)

秋である。親友コールリッジ(S. T. Coleridge)と妹ドロシイと共に、グラスミア湖の静かなほとりをそぞろ歩いている。そしてふと、風に運ばれるタンポポのわた毛やあざみに目を止めるのである。

And, in our vacant mood,
Not seldom did we stop to watch some tuft
Of dandelion seed or thistle's beard,
That skimmed the surface of the dead calm lake,
Suddenly halting now—a lifeless stand !
And starting off again with freak as sudden;
In all its sportive wanderings ... (ll.16-22)

静寂な湖面を滑るように飛んでいくわた毛は、一見無生物のようだが「何か内なる感情につき動かされており」、「生ある魂の目に見えない微風」の存在を知らせているという。

... all the while,
Making report of an invisible breeze
That was its wings, its chariot, and its horse,
Its playmate, rather say, its moving soul. (ll.22-25)

『序曲』(*The Prelude, or the Growth of a Poet's Mind*, 1805-6 & 1580)の冒頭でワーズワスを詩作へ誘い、“I wandered lonely as a cloud”(1804)で黄金色に輝く水仙(daffodils)を踊らせたあの「創造力の微風」(creative breeze)が、ここでもワーズワスをヴィジョン体験へと導いているのである。

収穫の季節であった。畑からは刈り取りをする老若男女の賑やかな声が聞こ

えてくる。そんな中、彼らは美しい花や水草、特に背の高い羊歯の花の優美さに酔いながら、岸边に沿ってゆっくりと進み、やがてきらきら輝く薄霞を通して、先方の岬の先端に一人の背の高い男の姿を目にする。

Through a thin veil of glittering haze was seen
Before us, on a point of jutting land,
The tall and upright figure of a Man (ll. 45-47)

男は釣りをしていたのであった。この収穫のまっ盛りの人手不足の時期になんと不用意なと、ワーズワスらはいぶかしがる。ところが驚いたことに、振り向いた男は、病にやつれはてて衰弱し、両脚はひょろ長かった。彼は収穫の作業に加わるなどできるはずもなく、おそらくは、釣りだけが、生活の助けとして彼にできるせめてもの労働だったのである。

... —and we saw a Man worn down
By sickness, gaunt and lean, with sunken cheeks
And wasted limbs, his legs so long and lean
That for my single self I looked at them,
Forgetful of the body they sustained.—
Too weak to labour in the harvest field,
The Man was using his best skill to gain
A pittance from the dead unfeeling lake
That knew not of his wants. (ll. 58-66)

美しい光景を眺めながらの「その快い朝ののんびりした幸福感」(The happy idleness of that sweet morn, l. 68)の中で、突然目にした厳しい現実、悲しい男の姿であった。ワーズワスらは、この日の思いを「忘れることのないように」と、この岬に「早合点」の岬と名付けるのである。

—Therefore, unwilling to forget that day,
My Friend, Myself, and She who then received
The same admonishment, have called the place

By a memorial name ...

And Point Rash-Judgment is the Name it bears. (ll.74-80)

ここには、ワーズワスの年齢に似合わない人間性(humanity)に対する深い洞察の片鱗が窺われる(ワーズワスは当時 30 歳であった)。それは、ワーズワス自身がいくつかの人間的苦悩(human sufferings)を体験⁽⁵⁾し、その後故郷の湖水地方の豊かな自然の中で、心の傷を癒しながら人間存在について深く瞑想するうちに、「人間性の静かで悲しい音楽」(still, sad music of humanity⁽⁶⁾)を聞くようになったワーズワスならではの感懐であり、それが、ワーズワス詩にしみじみとした深い味わいを加えているのである。したがって、その点では、この詩は「マイケル」(“Michael”, 1800)や「カンバーランドの老乞食」(“The Old Cumberland Begger”, 1800)のようなワーズワスの humanity poemsに通じる一篇なのである。

(5) ⑤“To M. H.” (1800)

次に登場するのは、2 年後に結婚することになる幼馴染みのメアリ・ハッチンソン(Mary Hutchenson)である。

ワーズワスと妹ドロシイは、「きこりの小道さえない」林を奥深く分け入って、「芝生と小さな池」を見出す。そこは、おそらく「牛や羊が水を飲みに訪れる」ような憩いの場であり、「日光も風も天の恵みのようにどこからかやって来る」という。この場所こそ「自然が自ら作ったもの」なのだとワーズワスは思う。そして、穏やかで控えめな女性メアリの名を、この場所につけるのである。

The spot was made by Nature for herself ;

The travellers know it not, and 'twill remain

Unknown to them ; but it is beautiful ;

... therefore, my sweet Mary, this still Nook,

With all its beeches, we have named from You ! (ll.15-24)

「旅人さえ知らず、これから知られることがないであろう」この美しい秘境、それは、ワーズワス唯一の恋愛詩とされる「ルーシー詩篇」(“Lucy Poems”)の

一つ“*She dwelt among the untrodden ways*”(1799)の、人跡未踏の地に住み、人に知られることなく死んでいった少女ルーシーを、思わせるものである。

She dwelt among the untrodden ways

Beside the springs of Dove,

A Maid whom there were none to praise

And very few to love:

A violet by a mossy stone

Half hidden from the eye!

—Fair as a star, when only one

Is shining in the sky.

(sts. 1 & 2)

そして、詩人がメアリの名をつけたこの秘境は、人跡未踏の地に住むルーシーがその場所と切っても切れない存在だったのと同様、メアリそのものであるかのような印象を、読む者に与えているのである(ワーズワスはまるで土地と結婚するかのようだと、悪口を言われたほどだという)。

(6) ⑥“*When, to the attraction of the busy world*”

(1800-1802)

冬である。身を切るような風が吹き、何週間も風雪のために道が閉ざされるころ、ワーズワスは住居近くの丘にあるモミの小森の下に、憩いの場を見つける。大きなモミの木々に守られたその場所には、時おり駒鳥や森の小鳥たちが訪れ、下生えのブナの木にはツグミが巣を作っている。迷った羊でもあれば一時身を寄せる、そんな避難場所であった。ワーズワスはここで何時間も、瞑想しながら時を過ごしたのである。

しかしながら、雪嵐の激しさやあまりに入り組んだ木々に足をとられることの大変さに、ワーズワスは、一時この憩いの場を訪れることを中断してしまう。

やがて雪がとけ、再び春の新緑が野原に戻って来た。そんな4月のある日、ワーズワスは久しぶりにこの場所に足を運んでみる。すると、以前あれほど苦勞して捜しあぐねていた木々の間の道が、たやすく辿れるように、小道らしきものができているのであった。

The snows dissolved, and genial Spring returned
To clothe the fields with verdure.

... one bright April day,
By chance retiring from the glare of noon
To this forsaken covert, there I found
A hoary pathway traced between the trees,
And winding on with such an easy line
Along a natural opening, that I stood
Much wondering how I could have sought in vain
For what was now so obvious. (ll.43-52)

その時、ワーズワスの心には「楽しい確信」が浮かんでくる。それは、しばしの間ワーズワス宅に帰郷していた船乗りの弟ジョン(John)が、この憩いの場を何度も訪れては、航海中船のデッキの上をゆっくり歩き続けたのと同じ足取りで、この場所を歩いて小道(A hoary pathway)を作ったのだというものである。

Pleasant conviction flashed upon my mind
That, to this opportune recess allured,
He had surveyed it with a finer eye,
A heart more wakeful ; and had worn the track
By pacing here, unwearied and alone,
In that habitual restlessness of foot
That haunts the Sailor measuring o'er and o'er
His short domain upon the vessel's deck ... (ll.58-65)

というのも、弟ジョンは船乗りとなって海へ出てしまったものの、今でもなお自然との絆を失うことのない「詩を語らぬ詩人」(A silent Poet)であり、短い間だが航海の合い間をぬって故郷の母なる自然の懷に帰ってきた時、この憩いの場を見出し愛したのに違いないと、ワーズワスには思えたのである。ワーズワスは、この場所に、今は「喜びのない海」に戻っていった弟ジョンの名をつ

ける。

—Back to the joyless Ocean thou art gone ;
Nor from this vestige of thy musing hours
Could I withhold thy honoured name,—and now
I love the fir-grove with a perfect love. (ll.84-87)

こうして、弟ジョンの面影を胸にこの場所を再び訪れるようになったワーズワスは、数々の幻想的な光景を目にするのである。

And there I sit at evening, when the steep
Of Silver-how, and Grasmere's peaceful lake,
And one green island, gleam between the stems
Of the dark firs, a visionary scene !
And while I gaze upon the spectacle
Of clouded splendour, on this dream-like sight
Of solemn loveliness, I think on thee,
My Brother, and on all which thou hast lost. (ll.90-97)

そして、「朝の微風 (breeze)のあらゆる衝動」——ワーズワスの creative imagination (創造的想像力)を導く「微風」である——に誘われながら、この憩いの場所の道を辿っている時、自分の歩調が、「喜びのない大洋」の上で故郷の山々を夢見ながら船のデッキを歩む弟のそれと一致していると実感するのであった。

Nor seldom, if I rightly guess, while Thou
Art pacing thoughtfully the vessel's deck
In some far region, here, while o'er my head,
At every impulse of the moving breeze,
The fir-grove murmurs with a sea-like sound,
Alone I tread this path ;—for aught I know,
Timing my steps to thine ... (ll.98-106)

この詩の結びには、「自分たち兄弟が、そして自分たちが愛する人々が、もう一度この美しいグラスミアの幸福な谷で再会できるように」という詩人の切なる願いが述べられている（悲しいことに、この願いはジョンの舟が難破することによって、実現することはなかったのであるが）。

... with a store
of undistinguishable sympathies,
Mingling most earnest wishes for the day
When we, and others whom we love, shall meet
A second time, in Grasmere's happy Vale. (ll.106-110)

ワーズワスの兄弟愛、そして人間的な優しさ、あたたかさといったものが、強く感じられる一篇である。先にみてきた5篇が、情緒的なものを排除して叙事的表現に徹しているのに対し、この詩は少々趣を異にしていると言えるだろう。つまり、ワーズワスの弟に対する兄弟愛と二人をつなぐ絆としての故郷の自然への愛、そして、ワーズワスの身近な愛する者たちへの愛情が、分ちがたく一体になって場所への思いに結実しており、叙情味あふれる作品となっていると言えよう。創作年代の点では、先の5篇と同様、この詩も1800年に書き始められているのであるが、おそらくこうした内容の相違によるのであろう。①～⑤が一つのまとまりのある詩篇として、『場所の名付けについての詩』の名のもとに、1800年の詩集『抒情民謡集』(*Lyrical Ballads*)第2版に初出しているのに対し、この詩⑥が収められているのは、1815年の『2巻の詩集』(*Poems in Two Volumes*)なのである。

しかしながら、土地の名付けが家族の精神的な絆のため、そして離れている愛する者たちの幸福、無事を祈る希望や願いといったもののためになされるというのもまた、とても自然なことではないかと思われる。言いかえれば、この詩が加えられることによって初めて、『場所の名付けについての詩』は完成するのである。

(7) ⑦“Forth from a jutting ridge”

(1845)

最後の作品は、ワーズワスが80歳でこの世を去る5年前75歳の時の作で、長年献身的にワーズワスに尽くしてきた謙虚で控えめな妻メアリと、その妹セアラ(Sarah)に捧げられている。ワーズワスの住居近くのライダル・マウント(Rydal Mount)の谷のまわりに広がる尾根には、ヒース(heath)に包まれた二つの突き出た岩がある。そのうちの「崇高なもの」はかなりの高さにまで達しているというが、共にその頂からは「湖、小川、花咲く草原」が眺められ、まこと美しい。そこへ、かつて冒険好きの二人の姉妹メアリとセアラが手に手をとって登り、眺望を楽しんだという。

Up-led with mutual help,
To one or other brow of those twin Peaks
Were two adventurous Sisters wont to climb,
And took no note of the hour while thence they gazed,
The blooming heath their couch, grazed, side by side,
In speechless admiration. (ll. 7-12)

その「目撃者」であり、共に同じ頂からの眺めを楽しみ、その喜びを分かち合ったワーズワスは、それらの高台に姉妹の名を与える。

I, a witness
And frequent sharer of their calm delight
With thankful heart, to either Eminence
Gave the baptismal name each Sister bore. (ll. 12-15)

すでにこの時、妹セイラはこの世を去っていたが、
Now are they parted, far as Death's cold hand
Hath power to part the Spirits of those who love
As they did love. (ll. 16-18)

今後時の流れと共に人間が世代交代を繰り返していったとしても、この姉妹の名をもつ高台はいつまでも美しいままでいるよう特権を与えられており、彼女たちの自然を眺めた時の喜びの記憶が、これからも、この同じ頂から眺望を

楽しむことによって同じ自然に対する喜びを共にする後の時代の人々の思いと混じりあって、いつまでも生き続けるようにとワーズワスは願うのである。

Ye kindred Pinnacles

... grant your aid

For M_{ARY}'s humble, SARAH'S silent claim,

That their pure joy in nature may survive

From age to age in blended memory.

(ll.18-26)

ワーズワス最晩年の作であるこの詩には、高齢の詩人が、今はもうこの世にいない親しい者たちのことが、やがて訪れるであろう自らの死を、そして人間の mortality (死すべき運命) を思いながら、いつまでも変わることのない美しい自然とそれを眺めて喜びとする人の心がいつまでも変わることのないようにと願う熱い思いが込められている。この詩もまた、先の弟ジョンについての詩⑥と同様、場所の名付けに希望や願いが込められていることについての詩なのである。

晩年のワーズワスは、汎神論(Pantheism)的な自然宗教から正統派キリスト教信仰へと改宗したと言われるが、この詩をみると、ワーズワスの自然宗教はおそらくキリスト教信仰と共存する形で、ワーズワスの中に脈々と生き続けていたのではないかと思われてならない。そして、いつまでも変わることのない自然の美を愛で、それを眺めて喜びとする人間の心が同じく不変であるようにとする祈りが、この詩には込められているのである。この詩こそ、ワーズワスが我々に残してくれたメッセージ、遺言のようなものとも言えるかもしれない。

以上、『場所の名付けについての詩』の7篇の詩を個々にみてきたわけであるが、全体を通して共通している点としては、場所にまつわるヴィジョン体験を中心として、ヴィジョン体験と人間の関係、そしてそれにまつわる人間的な思いが、それぞれ描かれているということがあげられる。——冒頭に付した「趣意書き」の中でワーズワスが名付けの動機として触れていた「出来事」(Incidents)とは、自然との交わり(communion)であり、それによってもたらされた

ヴィジョン体験であるということになる。やがて、それらのヴィジョンは、ワーズワスの心の中に「時点」として残り、永遠に輝きを失うことのない永遠の瞬間となるのであるが、命名はそれを記念して行われたものであるということになる。

一般に、「ワーズワス詩は時点の記録である」と言われるが、ここではそれが名付けによって、さらに象徴的な形で提示されていると言えよう。それからまた、これらの詩は単なるヴィジョン体験の記述に終わっていない点でも、大変に興味深いと思われる。つまり、他のヴィジョン体験を扱ったワーズワス詩が、とかく「自然と詩人自身の合一」といった形でのヴィジョン体験の描写に終始しがちなのに対して、これらの詩は、「名付け」という素朴な人間的行為が加えられることによって、さらに進んで、人間とヴィジョン体験のかかわりをも、明らかにしてくれているのである。

II 『場所の名付けについての詩』の構成

『場所の名付けについての詩』は、構成上、ヴィジョン体験の紹介に始まり、続いてヴィジョン体験と人間とのかかわりを示し、さらにヴィジョン体験が人間に対してもつ意味を明らかにするという形をとっている。つまり、ワーズワスは、徐々に内容を発展させる形で個々の詩を配列し、読者に提示していると思われるのである。

そこで次に、これらの詩を、その構成を中心にもう一度振り返ってみたいと思う。

(1) ヴィジョン体験——①②③

ワーズワスは、自伝的長詩『序曲』の中で「美と恐怖によって養われて成長した」(I grew up/Fostered alike by beauty and by fear, Bk. I, ll. 301-302)と述べているが、『序曲』に登場するワーズワスのヴィジョン体験には、まず子供時代のごく初期のものとして、自然の「美」を感じとることによってもたらされるものと、「恐怖」によってもたらされるものとがあげられる。そしてまた、青年

期になってからのものとして、その両方を結合したさらに一步進んだ形で最も強烈なヴィジョン体験として、肉体の感覚を失い、「目に見えない世界」を垣間見るような体験がある。

... when the light of sense

Goes out, but with a flash that has revealed

The invisible world ... (The Prelude, Bk. VI, ll. 600-602)

つまり、ワーズワスのヴィジョン体験には、大ざっぱに分けて全部で3種類の体験があるということになるのであるが、⁽⁸⁾『場所の名付けについての詩』の①～③に、その3種がそれぞれ描かれているように思われるので、そこからみていきたいと思う。

ワーズワスのヴィジョン体験のうちで最も強烈なものと思われる例が、まず①“*It was an April morning*”に登場している。それは、森の生き物たちの奏でる一つの「歌声」という形をとっており、『序曲』における同じく強烈なもの――

One song they sang, and it was audible,

Most audible, then, when the fleshly ear,

O'ercome by humblest prelude of that strain,

Forgot her functions, and slept undisturbed.

(イタリックは筆者。1805-6年版。Bk. III, ll. 415-418)

The immeasurable height

Of woods decaying, never to be decayed,

The stationary blasts of waterfalls,

And in the narrow rent at every turn

Winds thwarting winds, bewildered and forlorn,

The torrents shooting from the clear blue sky,

The rocks that muttered close upon our ears,

Black drizzling crags that spake by the wayside

As if a voice were in them ... (イタリックは筆者。Bk. VI, ll. 624-632)

——と共通している。

②“To Joanna”では、「驚き」や「恐怖」によってもたらされるヴィジョン体験が描かれていたわけであるが、ジョアナが思わずもらした笑い声が、岩々の叫びを生んだというもので、ちょうど“*There was a Boy*” (1798) で、小鳥の鳴きまねをしていた少年に鳴き返していた鳥たちが、急に鳴き止んだその瞬間、周囲の風景がその空間的広がりもろとも少年の心の中に入り込んできたように、

... a gentle shock of mild surprise
has carried far into his heart the voice
Of mountain torrents ; or the visible scene
Would enter unawared into his mind
With all its solemn imagery, its rooks,
Its Woods, and that uncertain Heaven, receiv'd
Into the bosom of the steady lake. (ll. 19-25)

その時目にしたローサ川の岩々の姿は、ワーズワスの心に深く刻まれることになる。

「驚き」という点では、④“*A narrow girdle of rough stones and crags*”と同様であろう（この詩については後に考察するつもりであるが、共通点があるので少々触れておきたいと思う）。のんびりと釣りをしていたかに見えた男が、実は病に衰弱した痛々しい存在だったことを知った「驚き」の瞬間、ワーズワスの目に映った光景は、その後いつまでも詩人の「心の目」(that inward eye⁽⁹⁾)に刻まれることとなる。そして、穏やかな秋の一日の湖とその岬で釣りをする男の姿は、一つのヴィジョンとなり、ワーズワスの心の中で、時が流れてもいつまでも輝きを失わないあの永遠の瞬間、「時点」の一つとなっていくのである。ちょうど、「決意と独立」(“*Resolution and Independence*”, 1802)で、水蛭取りの老人に出会った時、その老人の姿がワーズワスの目に刻み込まれたように。

Beside a pool bare to the eye of heaven
I saw a Man before me unawares :

The oldest man he seemed that ever wore grey hairs. (st. 8)

3 番目の詩③“*There is an Eminence*”には、自然の「美」によって導かれたヴィジョン体験が描かれている。先に触れたように、ワーズワスは「美と恐怖によって養われて成長した」と語っているが、この場合の「美」(beauty)とは、我々がふつうに考える「自然の美」とは、少々趣を異にしたものである。それは、広大な宇宙空間の中で地球が自転し、星や太陽が日々の運行を繰り返すといったような宇宙的眺望の中で捉えた、その運動に生の息吹きを吹き込む存在としての「自然の美」といったものである（詳しくは、筆者の「ワーズワスのヴィジョン体験」⁽¹⁰⁾、「ワーズワスと科学的精神」を参照のこと）。例としては『序曲』の中の、冬に氷の張った湖上でスケート遊びに夢中になっている際に、スピードをあげて急にストップした瞬間、周囲の断崖がすごい勢いで動いて見えたことから、地球の自転を感覚的に捉えた体験や、

... then at once

Have I, reclining back upon my heels,
 Stopped short ; yet still the solitary cliffs
 Wheeled by me—even as if the earth had rolled
 With visible motion her diurnal round !
 Behind me did they stretch in solemn train,
 Feebler and feebler, and I stood and watched
 Till all was tranquil as a dreamless sleep. (Bk. I, ll. 456-463)

同じくスケートに興じている時、遠くの丘から聞こえてくる「異質の音」(an alien sound)に、ふと心動かされた体験などがある。

The leafless trees and every icy crag
 Tinkled like iron ; while far distant hills
 Into the tumult sent an alien sound
 Of melancholy not unnoticed, while the stars
 Eastward were sparkling clear, and in the west

The orange sky of evening died away.

(Bk. I, ll. 441-446)

この詩③の中で、妹ドロシイがワーズワスの名で呼ぶことになる孤高の峰も、落日が最後まで当たる峰であり、流星が好んで訪れ、あの夜空に美しい木星も、その上に来た時に最も美しく輝いてみえるという(II. 9-13)。ワーズワスの宇宙的ヴィジョンの一端を、垣間見せてくれるものとなっている。

そしてまた、頭上遙か高く聳えるこの峰は、公道を歩くワーズワス兄妹に「しばしば深い静寂を送って」彼らの「心を蘇生させてくれるかのよう」だったという。「美」によるヴィジョン体験の特徴を、よく表わしている表現となっているのである。この詩は、ワーズワスの美によるヴィジョン体験を、最も崇高なイメージで表現したものの一つだと言えるかもしれない。

以上、『場所の名付けについての詩』の冒頭の3篇の中に、ワーズワスの3種のヴィジョン体験——美によるもの③、恐怖によるもの②、そして、その二つを結合した形での最も強烈なもの①——が描かれていることをみてきたわけであるが、この最初の3篇で、ワーズワスは『場所の名付けについての詩』の大前提として、名付けの動機がヴィジョン体験という自然との交わりであることを明示しているのだと言えよう。そして、④以降の詩では、この大前提のもとに「人間」にスポットが当てられていくことになる。

(2) ヴィジョン体験の中の人間像——④⑤

④“A narrow girdle of rough stones and crags”では、「驚き」によってもたらされたヴィジョン体験が描かれていることは既に述べた通りであるが、その驚きの対象となったものが、ここでは「人間」であることが注目される。湖に突き出た岬の先端で釣りをする痩せ衰えた男の姿、その時の光景は、周囲の穏やかな秋の景色と一体になって一種の心象風景となり、ワーズワスの心の中にくっきりと刻まれ、いつまでも残ることとなる。そして、この病にやつれた男の姿は、幾多の苦難にみまわれながらも、なお自ら労働に身を投じようとする老マイケルや、

Among the rocks

He went . . . and, as before,
 Performed all kinds of labour for his sheep,
 And for the land, his small inheritance. ("Michael", ll. 455-459)

「決意と独立」の水蛭取りの老人と同様、

Himself he propped, limbs, body and pale face,
 Upon a long grey staff of shaven wood :

...

Motionless as a cloud the old Man stood,
 That heareth not the loud winds when they call ;
 And moveth all together, if it move at all. (st. 11)

ワーズワス詩中の「自然の中の人間」の代表的な姿である。

ここには、言外にワーズワスの人間性に対する深い洞察が窺われることは、先に触れた通りであるが、そうした人間的な思いについては、次の⑥⑦の詩に受け継がれている。一種の伏線のような働きをしているのである。

2年後に妻となるメアリにあてた⑤“To M. H.”では、ワーズワスはまるで恋人について語るかのように、人に知られることのない美しい秘境を、称え慈しんでいる。一般に、ワーズワスはこの秘境を恋人と同一視していると言われていたが、「もし近くにコテージをたて、その木々の下で眠り、水音を聞きながら日々の食事をとったなら、そのイメージは、死ぬ時まで心に残ることだろう」とまで語っているのである。

And if man should plant his cottage near,
 Should sleep beneath the shelter of its trees,
 And blend its waters with his daily meal,
 He would so love it, that in his death-hour
 Its image would survive among his thoughts : (ll. 18-22)

この秘境を、恋人という生きた人間そのもののようにつまえていると言ってよい

だろう。

ここで、少しワーズワスの土地に対する特異な感覚について触れておきたいと思う。というのも、それはこの詩の場所(土地)についての表現の謎をとく鍵であるばかりでなく、ワーズワスが場所の名付けを行った際の、根底にあった観念でもあるように思われるからである。

ワーズワスは、『抒情民謡集』第2版の「序文」(“Preface” to the Second Edition of *Lyrical Ballads*, 1800)で、

The Reader will find that personification of abstract ideas rarely occur in these volumes; and utterly rejected ... (par. 10)

と語り、擬人化など虚構の要素を避けることにこだわり、現実味を大切にすることあまり、“matter-of-factness”⁽¹¹⁾——真実味を出そうとして余計な事実を説明しすぎる⁽¹²⁾こと——という欠点を、指摘されるほどの徹底ぶりを示した詩人である。ところが、そのワーズワス詩に、しばしば土地を生き物とみなしていると思われるものや、土地の擬人化が見出されるのである。たとえば、「マイケル」で、先祖伝来の土地が他人の手に渡りそうになった時、老マイケルが「この土地は他の主人には耐えられそうにない」と語ったものや、

—It [= the land] looks as if it never could endure

Another Master. (ll. 379-380)

“The Farmer of Tilsbury Vale”(1800)の老農夫アダム(Adam)が、彼の「畑は主人が何をしているか知っているかのようだ」と述べているものなどがそれである。

His fields seemed to know what their Master was doing; (st. 5)

まるで土地が意志をもった生き物であるかのように扱われていると言えよう。

ワーズワスが、このように土地を生き物として捉えるようになったことについては、ワーズワス自身の子供のころからのいくつかの体験がもとになっていると思われる。たとえば、周囲の事物が自分の肉体の延長であるように感じられて怖くなり、石の壁や堅い木の幹などに触れてみて自他の相違を確認すると

いった幼いころからのたび重なる体験に始まり、

... I was often unable to think of external things as having external existence, and I communed with all that I saw as something not apart from, but inherent in, my own immaterial nature. Many times while going to school have I grasped at a wall or tree to recall myself from this abyss of idealism to the reality.⁽¹³⁾

『序曲』には、自らの生の喜びを生命のない事物(unorganic natures)に与えたことや、

To unorganic natures were transferred
My own enjoyments; or the power of truth
Coming in revelation, did converse

With things that really are ... (Bk. II, ll. 391-394)

岩や果実、花ばかりでなく、路上に散らばる石のようなあらゆる自然物(every natural form)に、精神的生命(moral life)を与え、それらが感情をもつかのように見えたというもの、

To every natural form, rock, fruit or flower,
Even the loose stones that cover the highway,
I gave a moral life: I saw them feel,

Or linked them to some feeling ... (Bk. III, ll. 130-133)

それからまた、同じく子供のころの恐怖によるヴィジョン体験には、「孤独な丘の間から低い息づかい」が聞こえたというものや、

I heard among the solitary hills
Low breathings coming after me, and sounds
Of undistinguishable motion, steps

Almost as silent as the turf they trod. (Bk. I, ll. 322-325)

巨大な断崖が、まるで生き物のように背後からせり上がって、追いかけてくる

ように見えたというものがあり、

... from behind that craggy steep till then
The horizon's bound, a huge peak, black and huge,
As if with voluntary power instinct
Upreared its head. I struck and struck again,
And growing still in stature the grim shape
Towered up between me and the stars, and still,
For so it seemed, with purpose of its own
And measured motion like a living thing,
Strode after me.

(Bk. II, ll. 377-385)

そうした体験の後、丘や峰に自分の知らない生き物の存在(unknown modes of being)を感じるようになったと、ワーズワスは語っている。

... after I had seen
That spectacle, for many days, my brain
Worked with a dim and undetermined sense
Of unknown modes of being ...

(Bk. I, ll. 390-393)

そして、さらに青年になってからの肉体の感覚が失われる強烈なヴィジョン体験の中には、たとえば「ティンタン・アベイ」(“Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey, on Revisiting the Banks of the Wye during a Tour. July 13, 1798”)の中に、「呼吸」も「血液の循環さえ」も止まり、肉体が一種の仮死状態となった中での「事物の生命(the life of things)を見通す」という体験がある。

... the breath of this corporeal frame
And even the motion of our human blood
Almost suspended, we are laid asleep
In body, and become a living soul:
While ...

We see into the life of things.

(ll. 43-49)

こうした子供のころからのいくつかの体験を通して、ワーズワスの心の中で、生命のないはずの周囲の事物が、実はなんらかの生命を持っているのだという意識が育っていったのであろうと推測される。それが結局「生きた大地」であり、「生きた自然」(living Nature)であるというワーズワス特有の自然観に、つながったのである。ワーズワスが土地を生き物とみなしていたことは、その点からも容易に想像されよう。

このようにみえてくると、⑤“To M. H.”で秘境が恋人そのものとして捉えられていることも、ワーズワス自身にとっては、きわめて自然なことだったのではないかと思われるのである。そしておそらく、『場所の名付けについての詩』自体、こうした土地に対するワーズワスの特異な感覚から生まれた詩篇なのであろう。もっとも、「名付け」という点では、これまでみてきた他の詩篇もそれぞれ身近な人の名前がつけられていることから——①“It was an April morning”はエマことドロシイに、②“To Joanna”はジョアナに、そして③“*There is an Eminence*”はワーズワス自身に捧げられている——この詩の秘境にメアリの名がつけられていることも、同じような感覚で捉えることも可能であろう。しかしながら、①～③の詩は、ヴィジョン体験⁽¹⁴⁾が主となっていて、それを「記録し、そのときの感情を新たにするため」の命名が描かれていたのに対し、この詩の秘境は、名付けによって完全にメアリその人と一体化し、生きた恋人そのものと化している感が強いのである。

訪れる人もなく「自然が自らつくったもの」であるこの秘境は、ちょうど同じく人跡未踏の地にひっそりと暮らし死んでいったルーシーのように、ワーズワスの心の中の「生きた自然」そのものであり、理想の人間像、女性像であったと言えよう。

(3) 名付けに込められた思い——⑥⑦

①～⑤までの詩が、ヴィジョン体験やその中の人間を描いて、名付けに至るまでの過程をうたっていたのに対し、⑥⑦では、名付けが「人間の心」にどのような影響を及ぼし、どのような意味をもつのかについて、主として述べられている。

⑥“When, to the attractions of the busy world”では、ワーズワスがしばらく訪れることを止めていたモミの林の下の憩いの場に、人が通った跡があることから、それが、船乗りとなった弟ジョンが一時帰郷していた時に訪れたことを示すものと詩人が確信し、彼の名をつけたことが描かれていたわけであるが、そこには、ヴィジョン体験を通して自然との交わりを経験した者は、たとえ異郷にあっても、その思い出をいつまでも失うことはないとするワーズワスの思いが、根底にあるように思われる。

たとえば、「兄弟」“The Brothers”(1800)には、ジョンと同じく船乗りとなったレナード(Leonard)が、大海原で「肉眼で」故郷の「山々や青々とした丘の上で草をはむ羊たちや木々の間の住居、そして羊飼いの姿」を見る姿が描かれ、

Even with the organs of his bodily eye,
Below him, in the bosom of the deep,
Saw mountains; saw the forms of sheep that grazed
On verdant hills—with dwellings among trees,
And shepherds clad in the same country grey
Which he himself had worn. (ll. 60-65)

また、“The Reverie of Poor Susan”(1800)には、大都会ロンドンに働きに出された哀れた少女スーザン(Susan)が、故郷の山河の幻を見る様子が描かれている。

She sees
A mountain ascending, a vision of trees;
Bright volumes of vapour through Lothbury glide,
And a river flows on through the vale of Cheapside.

Green pastures she views in the midst of the dale,
Down which she so often has tripped with her pail;
And a single small cottage, a nest like a dove's,
The one only dwelling on earth that she loves.

She looks, and her heart is in heaven : but they fade,
 The mist and the river, the hill and the shade :
 The stream will not flow, and the hill will not rise,
 And the colours have all passed away from her eyes ! (sts. 2, 3 & 4)

そして、この詩の中で、海の上の弟ジョンもまた、異郷にあっても常に自然と共に歩む「語らぬ詩人」となり、故郷の自然の鮮やかな記憶を胸の中にいただきながら、

... thou ... to the sea hadst carried
 Undying recollections ; Nature there
 Was with thee ; she, who loved us both, she still
 Was with thee ; and even so didst thou become
 A *silent* Poet ... (ll. 76-80)

自然をうたった兄ワーズワスの詩を口ずさみつつ (Muttering the verses which I muttered first)、舟のデッキの上を歩み続けるのである。

Thou,
 Muttering the verses which I muttered first
 Among the mountains, through the midnight watch
 Art pacing thoughtfully the vessel's deck
 In some far region ... (ll. 98-102)

そして、故郷に残されたワーズワス自身も、弟の名をつけたこの憩いの場で弟と同じ思いを分かち合う。言ってみれば、「名付け」によって離れている者どうしの心が一つに結ばれるのである。「名付け」は、距離的な隔たりを超えて、兄弟や家族の、そして愛し合う者たちの心を結びつける絆となり、象徴となっていると言える。

最後の詩⑦“Forth from a jutting ridge”は、詩人の最晩年の作であり、長年献身的に尽くしてくれた妻メアリとその妹セアラにあてたものであるが、『場所の

名付けについての詩』の結びとしてまことにふさわしい作品である。——もつとも、ワーズワス自身、もともとそれを意図して書き上げたものなのかもしれないが、

うたわれているのは、個々のヴィジョン体験ではなく、無垢の心で自然との交わりを体験した二人の姉妹の思い出であり、ヴィジョン体験に代表される人間と自然との交わりの記憶が、絶えることなくいつまでも続くようにというワーズワスの願いである。そうした祈りを込めてなされたのがこの詩の「名付け」であり、ワーズワスは、姉妹がよく訪れた素晴らしい眺望をもつ並んだ二つの峰に、姉妹の名をつけているのである。

①“*It was an April morning*”では、ワーズワスは「エマの谷」の名の由来を数人の羊飼いにもちたらしめたというが、何年もたってワーズワスがこの世を去った後に、この谷は「エマの谷」と呼ばれるようになるかもしれないと、ワーズワスは想像しており、

And, of the Shepherds who have seen me there,
To whom I sometimes in our idle talk
Have told this fancy, two or three, perhaps,
Years after we are gone and in our graves,
When they have cause to speak of this wild place,
May call it by the name of EMMA'S DELL. (ll. 42-47)

また、②“*To Joanna*”では、ワーズワスは名付けを記念して、ローサ川のほとりの岩にジョアナの名を刻んだのであるが、それを見つけた近くに住む牧師は、ワーズワスにその由来を訪ねたという。ワーズワスは、おそらくこのようにして、ジョアナの名前をもつ岩の由来が、その土地の人々によって口伝えに語り継がれていくことを、想像したのであろう。

He [=The Vicar] with grave looks demanded, for what cause,
Reviving obsolete idolatry,
I, like a Runic Prest, in characters
Of formidable size had chiselled out

Some uncouth name upon the native rock,
Above the Rotha, by the forest-side.

(ll. 26-31)

そして、この詩 (⑦“Forth from a jutting ridge”)の姉妹の名をもつ峰も、その名付けの由来と共に語り継がれ、やがて、それを伝え聞いた人々のさまざまな思いが「ブレンドされた思い出となって」残るようにと、ワーズワスは願うのである。

⑥“When, to the attractions of the busy world”では、場所にまつわるワーズワスの思いが、名付けという行為を通して距離的な隔たりを超えて人々の心を結びつける働きをすることが、述べられていたわけであるが、⑦では、美しい自然と共に生きることによって得られた数々のヴィジョン体験の記憶が、時がたつて当の本人がこの世を去った後も、名付けという行為を通していつまでも人々の心に残り、同じく自然を愛する人々の同じような思いと共に、いつまでも生き続けるようにというワーズワスの願いが述べられている。つまり、「名付け」は、距離的な隔たりばかりでなく、時間的隔たりをも超えて、自然を愛する人間の心を結びつける契機となり得るのである。それは、人間と自然との純粹な交わりがこれからも永遠に失われることのないようにというワーズワスの祈りでもあったことであろう。

以上、①～③ではワーズワスの3種のヴィジョン体験の代表的な例を名付けの動機として紹介し、④⑤ではヴィジョン体験中の人間像を、そして、⑥⑦ではヴィジョン体験がもともなった名付けが、距離的・時間的な隔たりを超えて人々の心を結びつけ得るのだという名付けについてのワーズワス自身の思いが、それぞれうたわれていたことになる。構成上、名付けの動機に始まり、それが人々の心にどのような意味をもつものなのかということに至るまで、読者に伝わりやすいよう、徐々に発展させる形で提示されていると言っていいだろう。

もちろん、個々の詩はそれぞれの機会にそれぞれのインスピレーションのもとで作られたものであることに、相違はない。しかし、こうしてその構成を分

析してみると、一見きわめて素朴なものの寄せ集めであるかのように見えるこれらの詩が、実はしっかりした構成のもとに並べられ、明確なテーマをうち出す形で提示されていることがわかる。しかも、そこにはわざとらしさのようなものは微塵も感じられない。ここに、ワーズワスならではの構成の妙を見る思いがするのである。

ワーズワスは、晩年、持ち前の緻密な性格から自らの詩を分類し、個々の詩の配列についても自ら決定しているのであるが、セリンコート&ダービシャー (Ernest de Selincourt & Helen Darbishire) 編のワーズワス全集 *The Poetical Works of William Wordsworth* 第2巻の巻末の注では、これらの詩が「情愛 (Affections) に基づく詩篇」の直後に置かれていることの重要性が、強調されている。

It is significant of their spirit and intention that W. placed them immediately after the *Poems founded on the Affections*. (p. 486)

『場所の名付けについての詩』が「情愛」によるテーマを引き継ぐものであることは言うまでもない。そこにもまた、読者に伝わりやすいようにというワーズワスの構成の意図が、見うけられるのである。

結び

以上考察してきたとおり、『場所の名付けについての詩』は、しっかりした構成のもとにまとめられ、配列された詩群であることが明らかになった。しかし、これらの詩を一読した時、それが少しもわざとらしく感じられないのは何故であろうか？ おそらく、それは個々の詩自体がワーズワスの「力強い感情が自らあふれ出たもの」⁽¹⁵⁾ (the spontaneous overflow of powerful feelings) であり、虚構や虚飾的要素を全く含まないからではないだろうか。

『場所の名付けについての詩』にうたわれたワーズワスの名付けは、どれもきわめて素朴な動機でなされたものである。そして、控えめながらもどれもみな、不思議な心あたたまる魅力をたたえている。いわば、それぞれが神話を作り上

げる要素となり得るものなのである。

②“*To Joanna*”では、岩に刻まれたジョアナの名を見て不思議に思った牧師が、その由来をワーズワスに尋ねているが、ちょうどその牧師と同じ素朴な疑問をいただいた通りすがりの誰かが、またその由来を牧師の口から聞くことになるかもしれない。そうした過程を経て、名付けの由来は、それを耳にした人々のそれぞれの思いや空想が加えられていき、やがて全く別の物語が出来上がってしまうことにさえつながるかもしれない。ここに、我々は「神話」の起源を見るのである。「神話」と呼ぶには、これらの名付けはあまりにも素朴なものに思われるかもしれない。しかし、後に複雑な神話体系をもつに至った神話も、その原初の姿は、ちょうどここに描かれた場所への名付けのように、この上なく素朴なものだったのではないか？ そんな気がするのである。

ワーズワスは、虚構を嫌い、神話や伝説上の神々をうたうことに情熱を傾けることのなかった詩人である。しかし、『場所の名付けについての詩』という7篇の詩篇を残すことによって、いつのまにか、自ら小さな神話の創造主となったのである。

Texts

The Poetical Works of William Wordsworth (Oxford University Press, 5 vols., ed. Ernest de Selincourt & Helen Darbishire, 1940-1954).

The Prelude, or Growth of a Poet's Mind (Oxford Univ. Press, ed. E. de Selincourt, 1926, rev. ed. H. Darbishire, 1959)*『序曲』には1805-6年版と1850年版のテキストがあるが、本論の引用は断りのないものはすべて1850年の最終版によっている。

Notes

- (1) 1798～1807年とする説と、1796～1806年とする説がある。
- (2) ワーズワスは『序曲』の中で、自らの過去を振り返った時、その広大な過去の眺望の至る所にきらきらと輝いて見える時の点が見出されるとしている。そして、子供時代の初期に最も頻繁であったというそれらの「時点」は、ワーズワスの心の中で、時の流れに逆らっていつまでも輝きを失うことのない永遠の瞬間となるのである。

There are in our existence *spots of time*,
Which with distinct pre-eminence retain
A vivifying Virtue ...
Such moments ...
Are scatter'd everywhere : in our childhood even
Perhaps are most conspicuous. Life with me,
As far as memory can look back, is full
Of this beneficent influence. (イタリックは筆者, Bk. XI, ll. 258-279)

- (3) Matthew Arnold, "Memorial Verses", l. 63, from *The Works of Matthew Arnold* (Macmillan, 1903, vol. I, *Poems*), p. 252.
- (4) 上島建吉『虚空の開拓——イギリス・ロマン主義の軌跡』(1974, 研究社), p. 265.
* この本は, 数少ない『場所の名付けについての詩』を扱ったものの一つである。
- (5) ワーズワスは, ケンブリッジ大学在学中フランス革命勃発直後のフランスに滞在しているが, その際, その自由な革命思想に熱狂的に共鳴し, それが恐怖政治と化した時大いに失望している。また, それに荷担した母国イギリスへの愛国心との板狭みに苦しんでいたのに加えて, フランス女性アネット・バロン(Annette Vallon)との不幸な恋愛事件によって良心の呵責や痛手なども手助って, 大変な精神的危機を経験したのである。
- (6) Wordsworth, "Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey, on Revisiting the Banks of the Wye during a Tour, July 13, 1798", l. 91.
- (7) ワーズワスはこの峰を, 妻である姉のメアリにみたてている。
- (8) ヴィジョン体験については, 学習院大学大学院英語英米文学研究会同人誌『クリティコス』第2号(1982年3月)中の論文「ワーズワスのヴィジョン体験」で, 既に論じている。
- (9) Wordsworth, "I wandered lonely as a cloud", st. 4.
- (10) 「ワーズワスのヴィジョン体験」については上記(8)参照。「ワーズワスと科学的精神」(『中央学院大学教養論叢』第1巻第1号に掲載, 1987年3月)。
- (11) Samuel Taylor Coleridge, *Biographia Literaria*(Oxford Univ. Press, 2 vols., 1907), ch. 22.
- (12) ワーズワスの"matter-of factness"については「『湖水地方案内』におけるワーズワス散文の文体について」(『中央学院大学教養論叢』第1巻第2号に掲載, 1988年1月)を参照のこと。
- (13) Fenwick Note to "Ode. Intimations of Immortality from Recollections of

Early Childhood”(1802-6)from *Poetical Works of W. W.*, vol. iv, pp. 463-4.

(14) “Advertisement” to “Poems on Naming of Places”.

(15) “Preface”, par. 26.